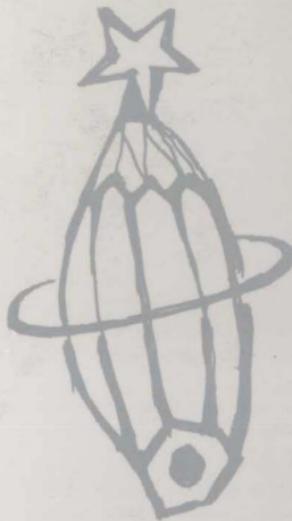


カルテの余白

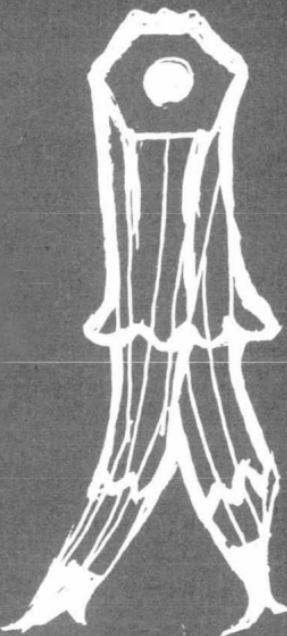
などいなだ



カルテの余白

などいなど

毎日新聞社



カルテの余白

定価 八八〇円

昭和五二年七月二十日
昭和五九年八月二十五日

第一刷 第十一刷

著者 なだいなだ

編集人 川合多喜夫

発行人 関根 望

発行所

毎日新聞社

東京都千代田区一ツ橋
大坂市北区堂島
北九州市小倉北区糸屋町
名古屋市中村区名駅

印刷 東京ベル印刷
製本 大口製本

カルテの余白 目次

I

デンワノイローゼ 11

精神の系統発生 15

てんかん性不機嫌にあらず 19

情報時代か、断絶時代か 22

アル中治療作戦要務令 25

大学で医の倫理が教えられるか 29

三 悪 32

情報と防衛反応 35

ことなかれ主義という病気

単純にびっくりしたいもの

患者同窓会 45 42 38

ドクター・ピックスー 48

えらい、とはなんだろう 51

ついに追い越された 55

自分のことはあえて棚に上げる 58

家族もつらい 62

狼が来る 65

コツズイセンシ 69

うつ病ばやり 72

年齢は何ではかればよいか 75

おおらかなことこそいいことだ	79
やらずぶつたくり	82
流れものの患者	85
ある良心的な男性	89
正しいか、間違っているか	92
女の復讐	95
世の中、悪くなるにきまつてゐる	99
あやまれ、あやまりなさい	103
ちくしょう、うまくやつてやがる	106
どういうわけか	110
笑う医者	114
患者の家族	117
家内に教わったなくしもの発見術	121

逃げだしたい

124

四十四歳、わかる男

128

家庭の事情

131

ゆうれいの話

134

変な死に方

138

II

ぼくは信じぬぞ

145

プロフェッサーと呼ばれた

145

医者でもわからんこと

152

あやしげなる人間像

156

健康強迫神経症

159

「うつ病にする会」

163

148

くもの巣亭

166

人間が犬なみでなくなつた不幸
なんだか、へんだ

173

無学文盲です。信じて下さい

十八歳以上おことわり

180

おしゃべりの国

184

いやらしき中年

187

会議ばやり

191

変な病気にかかつたぞ

194

若い女たちの食欲をなくさせろ

198

キツネつきをさがしたが…

201

オシエロコジキたち

205

ほめる

208

電話魔のおばさん

212

無責任なことをいうな

とばっちらり

219

三、二、一、ゼロ、発射

226

216

悲しい顔と楽しい顔
いつもニコニコ日本人

230

223

夢の中の夢

234

毛沢山君のこと

237

あとがき

241

カルテの余白

I



☆デンワノイローゼ

患者の話ではない。ぼくのことなのだ。精神科医のぼくがである、最近はデンワノイローゼなのだ。電話がこわい。リリーンとベルが鳴るとギクリとする。心臓がとまりそうな気がする。スランプで筆が進まず、さいそくの電話がかかるのを恐れたことがはじまりである。さいそくの電話がもうかかるて来る、もうかかるて来る、そう思いながら書き終らない原稿を眺めている。先の文章がどうしても出て来ない段落を見つめていると、昔習った数学の不連続などという言葉が、思い出そうともしないのに勝手に頭に浮んでくる。そこにリリーンだ。やつ、来たなと思う。こわい編集者の顔が目の前にちらつく。ところが、別の人からの電話だ。

「この間は、わざわざ講演においていただきまして」

「はあ」

「ありがとうございました」

「はあ、それで」

「ただ、それだけでござります」

「はあ」

「面白くて、有益なお話だったと、一同喜んでおります」

「はあ」

「そのことを、一言、お礼申し上げたくて」

ていねいな人だ。礼儀正しい人だ。だが、その礼儀正しさがうらめしくなって来る。受話器を置いて、もう一度原稿用紙とにらめっこすると、一字も書かないうちにまた電話だ。
今度こそさいそくの電話だぞ、と思う。

「××出版社ですが」

「まだ、できてません」

「あもしもし」

「ダメなんです。かんべんして下さい。あと一日待って」

「もしもし、おかしいな。これから原稿をおたのみしようと」

「おかしいな。××出版でしょ」

「そうです」

「あの、○○っていう雑誌の原稿でしょ」

「あれ、〇〇で、何か」

「そうなんです」

「でも、こちらは同じ社でも、別の雑誌なんですよ」

「そうですか」

「ぼくはそこでガックリする。何でまた、一つの出版社で幾つもの雑誌など出すのだ。事情を説明してかんべんしてもらつて、また席にもどる。そして、今まで書いて来たところを読み直す。ペンをとりあげようすると、リリーンだ。今度は作家の友人からだ。

「おい、なだか」

「そうです」

「おれが、わかるか」

「わかる、わかる」

「それなら、ダレだ。言ってみろ」

「わかってるんだ。用件を言つてくれ」

「お前、何でそうセカセカするんだ。ああ、そうか、お前、今、奥さんと、フフフ」

「ちがうよ、ちがう」

「じゃ、風呂に入ろうと思つてハダカになつたところか。今、身に何をつけている。パンツか。お前はハダカになる時、上から先に脱ぐのか、下から先か」

「ちがうんだ。風呂は三日も入っていない」「

「それは、いかんぞ。おれは風呂だけは毎日」

「それで、何だい」

「じゃ、少しは話していいんだな」

ここまで来るのが、なんと長く感じられることだろう。

「じゃ、話すぞ」

「なんだい」

「おれは、今、酒をのんだところだ」

「そぞらしいな」

「わかるか」

「わかるよ」

酒の匂いなど、電話線をちゃんと伝わってくるものなのだ。

「それで、ちょっと機嫌がいい」「

「よさそうだ」

「それで、ふとお前と話したくなつた。用件てものは、特別ない」「
ぼくはガツクリと安楽椅子に腰をしづめる。